

私の研究



「さくらっこ」の輝きを保育者養成に ～子育て支援広場を学生と作る～

狩野 奈緒子 (かのう なおこ)

桜の聖母短期大学 生活科学科 福祉こども専攻
こども保育コース 教授



1. はじめに

幼稚園教諭と保育士を目指す学生の教育に携わり20年、保育の深遠さと子どもの育ちの不可思議さに感動しながら、私自身も学び続けています。

本学に赴任して12年目を迎える自分の仕事が教育と臨床の二本立てと考えられるなら、私の教育臨床フィールドの中核となっているのは本学こども保育コース運営の子育て支援広場です。

平日2回「親と子のひろば」、そして2017年度より地域保護者運営に移行した土曜日「さくらっこ広場」の親子との出会いの中で、そこでの出来事、子どもの育ちの経過、子どもの姿から、その意味の読み取り方を学生に還元していくことが私の教育臨床研究の全てと言えます。

学生たちは、2年間の1年目には、自らの視点で子どもと出会い、かかわり、考えるための参加

観察の場として「広場」を活用します。2年目には、保護者の気持ちや子育て支援へのニーズ、地域で行う子育て支援の必要性や社会的機能を学ぶ場として活用します。

私は、この「広場」で出会った親子の事例について何年かの変容を追い、発達過程で周囲との関係に生じる課題などを分析します。課題を追い、出会う親子の育ちあいの力を考察し、保育者を目指す学生たちの保育現場への期待を育てることも、私の研究の目的と意識しています¹⁾。

事例研究は一つのモデルですが、「二つとない」モデルでもあります。

事例の「二つとない」それぞれの経過を掘り下げながら、追い始めた当初とは違う視点や意味合いが見えてくることも少なくありません。

個別の事例同士の共通項が見えてくることも当



図1 ぬいぐるみでお話し



図2 シャボン玉あそび



図3 クッキング

然ありますが、特に子ども一人ひとりの「その子らしい育ち」への感動が私の臨床の原動力になっています。

次に「広場」の事例について、私の授業でどのように活用しているかをご紹介します。

2. 事例

(1) B児（男児）

言葉の遅れやこだわりの強さ、指示の入り難さなどを心配して、母親と「広場」に参加するようになったお子さんです。

その日は、テラスに絵具やペットボトルの水などを用意し、子どもたちが水や絵の具であそべるように準備されていました。

B児は、車が大好きでお気に入りのミニカーを自宅から持ってきました。早速、テラスに出て水遊びが始まり、学生のかかわりの様子が記録されました。

エピソード「せんしゃ？」（3歳：6月）：学生の記録

Bくんは、1番に外に出て水遊びを楽しみだした。水の入ったバケツを見ると、両手で「バシャーン！」とひっくり返す。実習生がまたバケツに水を汲んでくると、「バシャーン！」と繰り返す。すると、次は机にあった紙皿を持ち、バケツの水をくみ、もう一つの紙皿へ入

れる。実習生が「そんなに入れたら水があふれちゃうよ？」と声をかけるが、おかまいなしにタプタプになった水があふれている紙皿に車をゆっくり入れる。実習生が「何しているの？」と声をかけると、「せんしゃ！」と答え、「ザブーン」と言いながら続けた。

その後、Bくんは車を持ち何かを探し始めた。「何探しているの？」と聞くと、車を見せて「ビチャビチャ」と答えたので、タオルを渡すと車をきれいに拭いて満足そうだった。

記録には、周囲にお構いなしに水をひっくり返すB児のあそびに戸惑いながら、あそびのイメージを学生が必死に想像している様子が現れています。

このエピソードでは、B児の言う「せんしゃ」が実は「洗車」だったということが、最後に「タオルで車を拭いて満足そうだった」という記述で読み手にもわかります。学生はこの間、懸命に考え続けているのです。

B児のことばは3歳にしてはたどたどしい表現ですが、学生がどのように子どものイメージを察して何を表現しようとしているかを推測し、あそびを支える援助をしたのか考察することが、授業での学生の学びとなります。

学生の記録は、このように戸惑いから始まることが多くあります。特に、B児のように発達に特

徴のある子どもの場合、現場では、子どものあそびの世界に保育者が共感し、その世界を支え続ける力が求められます。まさに、保育者養成の段階で、学生に「育てたい力」を考えさせられる事例でもあります。

(2) M児 S児 (男児一卵性双生児)

M児、S児は2歳代から「広場」に参加し、幼稚園入園後は父親と共に土曜日「広場」に毎回参加する、とても元気な兄弟です。

2歳代から3歳代では、同じおもちゃの取り合いで機嫌を悪くした片方の子どもを父親がなだめると、今度は父親を取り合うという二人の駆け引きが多くみられ、私や学生を感心させていました。徐々にこの二人は見事なチームワークを見せるようになり、二人だけの世界を持つようになっていきます。他の子どもと対峙するときには一枚岩になって応戦するという姿も見られるようになりました。

5歳になると、二人のあそびの世界に他の子が参画する場面が見られるようになります。

エピソード「僕にもやらせて」(5歳 M児、S児がR児と共に 7月)：筆者の記録

MくんとSくんが、今日は、お父さんに買ってもらった空気圧で飛ばすペットボトルのロケットを持ってきた。広い短大の駐車場で飛ばすのを楽しみに持ってきたようだった。

最初は、お父さんと3人であそぶ様子を学生が傍らで眺めていたが、そこに友達のRくんとそのお母さんがやってきた。Rくんも目を丸くしてロケットを飛ばすのを眺めていたが、そのうち「僕にもやらせて」とMくんに頼んだ。Mくんは即座に「ダメ!」と答えた。それでもRくんは繰り返し「貸してよ」と粘った。Rくん

のお母さんが、「Mくんたちのだからね」となだめる。Mくんのお父さんも「貸してあげなよ」とうながすが、両者は頑として引かない。学生は困ったようにして眺めていた。

しばらくすると、一緒にいたSくんが突然「いいよ、貸してあげる」といった。皆、あっけにとられた表情をした。Mくんが「ダメだよ」と言い続けるが、Sくんはちょっとニヤリとして「いいよ」と言い、すかさずRくんは学生に手伝ってもらいながらロケットを飛ばし始めた。

大人たちはあっけにとられたが、Mくんは結局シブシブRくんが飛ばすのを眺めつつ、自分の番を待つことになった。

この場面のS児のふるまいには、皆、「あっけにとられた」という表現がぴったりでした。しかも、あれほど貸すことを渋っていたM児が、ここで一気に譲歩したということも驚きです。S児はちょっとニヤリとしましたが、どういう気持ちだったのでしょ。

「広場」の後には、参加した学生と必ず振り返りの時間を持ちます。私のゼミの学生たちと、このエピソードを振り返りながら双子の兄弟の育ちの経過を辿り考えました。

二人の世界ができていって、そこに他の子どもが参画していく過程の中で、また親同士も含めた育ちがずっと続いていくように思えました。

このような二人の育ちは、大人の想像をはるかに超えるものではないかと話し合った私たちでした。

コロナ禍で、普段の「あそび」の場を確保することが難しい時代になりました。子どもだけでなく、大人にとっても子どもが自由に遊ぶ場を作り、それを皆で支え合うことが、親子同士が育つ力、

生きる力につながるのではないのでしょうか。

最後に「広場」とは離れますが、大学院修士課程時代に修士論文の事例として出会った、私の臨床の仕事の原点である男児を紹介します。

(3) K児 (男児)

呼吸不全のため生後1日で気管内挿管、生後5カ月目に抜管のため気管切開し、発声できないまま成長したK児に初めてお会いしたのは、K児が3歳の時でした。

K児は発声することができませんが、入院中に隣のベッドの子どもが使っていた舌打ち音を模倣して使うなど、賢いお子さんでした。その後、小学生の姉が小児手話を基に作り出した手話サインなどを駆使して、家族の中ではコミュニケーションに困らない状態に育っていました。

声が出ない以外は大変元気に育ったK児が幼稚園に入る段になり、家族以外の人とのコミュニケーション手段をどのように確立していくかが、家族としての最大の命題となりました。結局、K児の見事な育ちの力を家族と共に幼稚園が支え、周囲の子どもとの関係も「言葉を介さないコミュニケーション」の中で、実に見事に育っていくこととなります。

この事例を学生に紹介し、いつも「コミュニケーションの本質は何か」ということ、「コミュニケーションの本質的な力を育てる環境には何が必要なのか」を考える授業を毎年続けています。

私が2年間幼稚園で経過を見せていただいた後は、その後の経過を知らずにいましたが、K児は高校1年生の夏に白血病で亡くなってしまいました。K児が亡くなった後、知人から学校入学後にご両親が苦労されたお話なども聞きましたが、お母さんはこの子を看取った2年後に、後を追うように病で亡くなりました。

K児の葬儀の時に、お母さんに声もかけられず、頭を下げるしかできなかった自分を、今も不甲斐なく思います。育ちのエネルギーが輝いていたK児が短い命を終えたことや、お母さんがその最期を看取って逝かれたことは、今でも言葉にならず私の中で整理できずに残ったままです。

3. おわりに

出会いの中で生かされてきたことを痛感します。臨床の奥深さにもがく時もありますが、青空を見上げて歩み続けられる今を幸せに思います。

この道に導いて下さった恩師、共に歩む同僚たち、そして出会った全ての親子の皆さまと学生たちに感謝する日々です。

文献

- 1) 狩野奈緒子 (2016) 広げよう子育て支援ネットワーク：子育て支援ひろばをつくろう(8) 東日本大震災後の子育て支援広場の中での育ち合い 実践と対話の中で学び続ける保育者養成を目指して. 子育て支援と心理臨床 Vol 11, 110-113. 福村出版

<プロフィール>

1959年生まれ 1982年宮城教育大学言語障害児教育教員養成課程卒業

宮城県立養護学校教員、仙台市立小学校教員、専業主婦を経て大学院修士課程入学 2001年宮城教育大学教育学研究科障害児教育専攻専修修了 仙台市児童相談所、仙台市発達相談支援センターなどで言語判定員、発達相談員 東北外語観光専門学校教員 2011年4月より現職